



アガサ・クリスチー 長沼弘毅 訳

オリエント急行の殺人

検印
廃止

訳者紹介 1960年11月21
日、東京に生まる。1928年
東大法学部卒業。現住所、
東京都品川区東五反田3～
15～1，国際ラジオセンタ
ー会長

オリエント急行の殺人

1959年10月16日 初版
1970年4月17日 19版

著者 アガサ・クリスチ

訳者 ^{なが}長 ^{ぬま}沼 ^{こう}弘 ^き毅

発行所 (株) 東京創元新社

代表者 秋山孝男

(162) 東京都新宿区新小川町1-16

電話 (268) 8231-5

振替東京 1565

恵春堂印刷・鈴木製本

オリエント急行の殺人

アガサ・クリスチ

オリエント急行列車に乗り合わせた十四人の乗客は積雪に閉じ込められてしまった。その翌朝ひとりの乗客が、からだ一杯に十二個所の傷を受けて死んでいた。そこで乗客のひとりエルキュール・ポワロの、小さな灰色の脳細胞が働き出す。被害者はアメリカの稀代の幼児誘拐魔であった。しかしオリエント急行の乗客は、イギリス人、アメリカ人、ロシア人、イタリア人、フランス人、スウェーデン人と雑多であり、縁もゆかりもない。ポワロの前に乗客が、ひとりずつ呼ばれて行くだが、あらゆる乗客にアリバイがあった。

登場人物

- ラチエット……………アメリカの老人
- マックイン……………ラチエットの秘書
- マスターマン……………ラチエットの召使
- アーバスナット大佐……………イギリス人
- メアリー・デベナム……………イギリス人の家庭教師
- ドラゴミロフ公爵夫人……………ロシア亡命貴族
- ハッバード夫人……………中年のアメリカ人
- グレタ・オールソン……………スウェーデン婦人
- アンドレニ伯爵夫妻……………ハンガリアの外交官夫妻
- ハードマン……………アメリカ人、私立探偵
- アントニオ・フォスカレリ……………
- ……………アメリカに帰化したイタリア人
- ピエール・ミシエル……………車掌
- コンスタンチン博士……………ギリシア人、医師
- ブーク……………国際寝台車会社の重役
- エルキュール・ポワロ……………ベルギー人、探偵

オリエント急行の殺人

アガサ・クリスチィ

長 沼 弘 毅 訳

156

創元推理文庫

MURDER ON
THE ORIENT EXPRESS
(Murder in the Calais Coach)

by

Agatha Christie

1934

目次

I 一、三の事実

1	タウラス急行のたいせつな客	二
2	トカトリアン・ホテル	三
3	ボワロ、依頼を断わる	四
4	深夜の叫び	四
5	事件起きる	五
6	犯人は女か？	六
7	死 体	七
8	アームストロング誘拐事件	八

II 乗客の証言

1	車掌の証言	三
---	-------	---

2	秘書の証言	一〇〇
3	召使の証言	一〇七
4	アメリカ婦人の証言	一一五
5	スウェーデン婦人の証言	一二六
6	ロシア公爵夫人の証言	一三三
7	アンドレニ伯爵夫妻の証言	一四二
8	アーバスナット大佐の証言	一四九
9	ハードマン氏の証言	一六二
10	イタリア人の証言	一七〇
11	デベナム嬢の証言	一七六
12	ドイツ人の女中の証言	一八三
13	乗客の証言の要約	一九二
14	兇器	二〇二
15	乗客の荷物	二二三

Ⅱ ポワロ、すわって考える

1 どの乗客か？ 二三四

2 疑問点 二四四

3 暗示 二五一

4 パスポートのしみ 二六三

5 公爵夫人のクリスチャン・ネーム 二七二

6 大佐との二回目の会見 二七九

7 メアリー・デベナムの素性 二八三

8 驚くべき発見 二八九

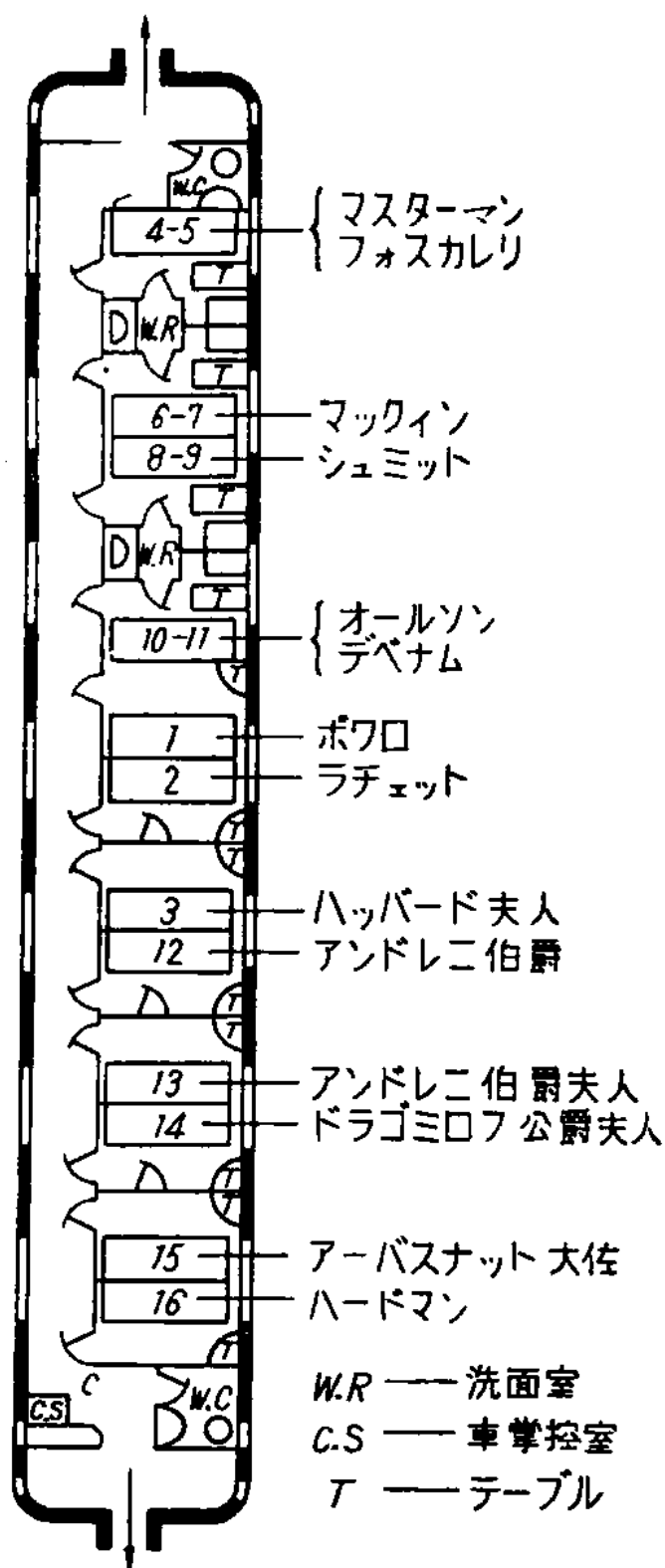
9 ポワロ、ふたつの解決を示す 二九八

あとがき

訳者 三九

オリエント急行の殺人

食堂車



アテネ=パリ車両

I 二、三の事実

1 タウラス急行のたいせつな客

シリアの冬の朝の五時である。アレppo駅のプラットホームには、旅行案内にタウラス急行と太文字で名が出ている列車がとまっていた。食堂車と寝台車、それに地方車が二台の編成である。寝台車のステップのそばで、金ぴかの制服に身を固めた若いフランス人の陸軍中尉がひとりの小がらな男と話をしていた。その男はマフラーで、耳の上まですっぽり包んでいた。見えるところは、鼻の先と、左右にぴんとはねあがった口ひげだけである。

外は、凍るような寒さであった。この有名人を見送るという役目は、決してうらやむべきものではない。がしかし、デュボスク中尉は、りっぱにその任務を果たしていた。彼のくちびるからは洗練されたフランス語で、上品なことばが流れ出た。いったいどういうことなのか、彼にはわかっていなかった。もちろん、うわさは聞いていた。ああいう事件には、うわさはつきものである。將軍——彼の上役の將軍のご機嫌が一日一日悪くなって、そうして、このベルギー人のお客

がやって来た——なんでもはるばるイギリスからやってきたということだ。一週間——緊張の一週間だった。それから、あることが起きた。名のある高官が自殺をし、もうひとりが突然辞職した。すると、曇っていたひとびとの顔が突然晴れやかになり、軍隊の警戒体制が解かれた。デュボスク自身の上役である、將軍は、十も若返ったようになった。

デュボスクは、將軍とこのお客の間に交わされた会話をもれ聞いたことがある。

「まったくあなたのおかげです」將軍は感謝していった。口を開くたびに、彼のまっ白の口ひげがゆれた。「あなたのおかげで、フランス軍隊の名誉が救われたのじゃ——つまり、血を流さずにすんだ！ 私のたったの願いを、よくぞ聞きとどけてくださった、お礼のことばもない。わざわざ遠路をお越しいただき——」

このことばに答えて、エルキュール・ポワロというお客は、じつに適切な返事をした。——

「しかしです。かつて閣下は私の命をお救いくださったではありませんか？」

すると將軍は、昔のことを謙遜することばを述べた。それから、またもやフランスだのベルギーだの、栄光だの名誉だのとかいうことを、くどくど述べて、ふたりは、ここから抱き合った。そういうことがあっても、デュボスク中尉には、なんのことやら、まださっぱりわからなかった。しかし、かれはタウラス急行に乗車するポワロ氏を見送るという任務を与えられ、前途洋々たる若い士官に独得の熱意と情熱を持って、いまここにその任務を遂行しているというわけだった。

「きょうは日曜日ですから、あす、月曜日の夕方には、スタンブールにお着きになっていられます

す」と、デュボスク中尉はいった。

彼はこれで、もう何回かおなじことばを繰り返している。汽車が発車するまでの間、プラットホームで交わす会話は、ともするとおなじことの繰り返しになりがちである。

「そういうことですか」ポワロはうなずいた。

「スタンブールには、二、三日ご滞在でございましょう」

「そりゃあもう。スタンブールには、まだ一度も行ったことがないもんでしてね、素通りするのは惜しい気がします」

彼は、ことばを強めるように指を鳴らした。「別に用事はないんだが——ただの観光客として、二、三日滞在しましょうかね」

「セント・ソフィア寺院は、じつにすばらしいものです」デュボスク中尉はいったが、じつは、自分もまだ見たことはなかった。

冷たい風が、ひゅうひゅうとプラットホームを吹きまくった。ふたりの男はふるえあがった。

デュボスク中尉は、何げない振りをして、そっと腕時計をのぞいた。五時五分前——あと五分の辛抱だ！

この内証のふるまいに気づかれたような気がして、彼は、急いで会話をつづけた。

「こんな季節には、旅行者は少ないですね」デュボスク中尉は、寝台車の窓を見あげた。「タウラス山中で、雪に閉じ込められるようなことが、なければよろしいですが」

「そんなことがあったんですか？」

「ございました。もっとも、今年になってからはまだのようですが」

「そんなことがなければよいが。ヨーロッパ方面の気象通報を聞いたが、あまり感心せんようです」

「たいへん悪いのです。バルカン地方は、大雪だということです」

「ドイツも、そうらしいですね」

「ところで」とデュボスク中尉は、ことばが途切れそうになったので、急いでつなぎとめた。

「あすの晩、七時四十分に、スタンブールにお着きです」

「さよう」ポワロは話のつぎ穂がないので「セント・ソフィア寺院は、すばらしいということですな」といった。

「さぞ壮観なことでしょう」

ふたりの頭の上で、寝台車の窓のブラインドがあき、若い女が顔を出した。

メアリー・デベナムは、先週の木曜日にバグダッドをたってから、ほとんど眠っていなかった。キルクークまでの汽車のなかでも、モズールの宿屋でも、そして、この汽車のなかで過ごした昨晚も、ただうつらうつらとただけだった。おまけに、車内の暖房がきき過ぎて押しつけられるように熱く、目を覚ましたまま横になっているのが苦痛になったので、起きあがって外をのぞいたのだった。

アレップだわ。でも、見るものなんてなにもありやしない。長々とつづいた薄暗いプラットホームがあるだけで、アラビア語で激しくのしり合う声が、どこかで聞こえてくる。窓の下には、

男がふたり、フランス語で話をしている。ひとりにはフランスの士官で、ひとりには、偉大なる口ひげをたくわえた小男である。彼女は、かすかにほほえんだ。この男のようにマフラーで顔をすっぽり包んでいる男は、見たことがなかった。外はひどく寒いんだわ。だから、車内の温度を、あんなにあげたんだわ。彼女は、窓を少し細目にしようとした。しかし、びくともしなかった。

車掌が、ふたりの男に近づいて、そろそろ発車いたしますから、ご乗車くださいと声をかけた。小がらの男のほうに帽子を取ってうなずいた。その頭の形ときたら、卵そっくりである。メアリ・デベナムは、自分の心配ごとを忘れて、ついくすりと笑ってしまった。おかしい顔をした小男だこと。まじめに相手になる気もしないような小男だわ。

デュボスク中尉は、別れのあいさつを述べはじめた。ちゃんと暗記してきたそのことばを、最後の瞬間まで取っておいたのだ。まことに美しく、洗練されたあいさつであった。

そこは、ポワロも、負けてはいなかった。彼も、おなじように美しいあいさつを返した。

「ご乗車願います」車掌がいった。

それではいたしかたがないといったようすで、ポワロは、汽車の高いステップをあがった。車掌もそのあとにつづいた。ポワロは手を振り、デュボスクは拳手の礼を返した。その間を、列車は、ガタンと一度つまずいてから、ゆっくり前進して行った。

「やれやれー」エルキュール・ポワロはつぶやいた。

「ブル、ル、ル、ル」デュボスク中尉は、急に寒さが身にしみた。

「こちらでございます」車掌は、大げさな身ぶりで、ポワロのコンパートメントを指すと、なか